

いくつになろうが生き様を問い続ける姿勢は、見習いたい

夏休み(?)に入り、録りダメのビデオを見ているが、その中に「その時 歴史が動いたー生まれくる命 そして母のためにー」があった。

よくご存知の荻野久作博士の物語であった。

氏は花形の診療科を避けて人の行かない産婦人科を学び、大卒後直ぐに新潟の民間病院に勤務。

そこで、男尊女卑の封建的な家父長制度色濃い時代(今から80年前)の陰で、跡取りが生れないがために離縁されて自殺する女性や、多産のために命を落とす女性等の悲惨な現実を目にする。女性の命を守るために、人類の謎であった「人はいつ受胎するのか」の研究に、忙しい診療の合間に取り組んだ。

発想の転換からの研究の結果、「受胎は、月経前の12～16日の間」の推論を導き出し、我が子の受胎にも応用し確信する。

しかし、日本の当時の権威主義の学会では一民間医の説は認められず、当時の医学の先進国であるドイツに単身渡り説いて回るも、認められず。落胆の折、キリスト教カトリック信者の中で「自然の摂理に従う避妊法」という側面からこの説が注目され、一気に世界に広がり、科学的にも立証されて学説となった。

氏は、帰国後あまたの大学からの教授職への誘いを断り、以前のままた新潟で92才で逝去するまで勤務医を続けた。

高度経済成長時代、日本でも避妊法として学説が乱用される風潮に、氏(当時80才)は文芸春秋誌上で、「避妊に失敗して 人工流産の道を選ぶ心ない男女が多いことを 一体どう考えたらいいのだろうか。どうしてもいっておきたいことがある。それは もっと真剣に 深刻に 子どもとは何であるかを考えるようになって欲しいということである。かって 私は荻野学説を発表した。しかし それは 命を守るために生み出した学説であって決して避妊法の研究でなかった。」と、激しい文章で異を唱えた。

80才になってもなお、自らの名声をいとわない氏のこの熱意と実行力は、氏が云う「60年間勤務する中で『オギャア』を耳にする度に、朗らかな気分になる。恐らくは生命の誕生というものがもつ 侵しがたい価値に由来するのであろう。」という命の尊厳の想いに根ざしていたものと思う。

いくつになろうが自らの生き様を問い続ける氏の姿勢は、見習いたいものである。

(2006年8月7日 記)